

## ミュンヘン近在の強盜騎士

(背景は市の外壁。その上にかぶさるよつに花盛りのリラの木が茂っている。二つの銃眼の前にはおもちゃの大砲が置いてある。中央には街灯。上手にはぎざぎざの壁のついた小さなやぐら。下手にはバイエルンの紋章と「歩哨詰所」の札のついた木骨小屋。小屋の前には洗濯物が紐に干してある。リラのしげみの下にはベンチが一脚。そのわきの壁のくぼみにはビール・ジョッキと大根が入っている。)

カール・ファレンティンが歩哨ベーネ、リースル・カールシュタットが少年鼓手ミヒルを演じる。

幕が上がると、舞台は夜明けの薄明りの状態にある。街灯は点いている。いくつもの教会の朝の鐘が聞こえる。幕が完全に開ききるまでに、教会の時計が六度打つ)

### 第一幕

#### 第一場

夜番 聞け、皆の者、耳をすませ、

塔の鐘が六時を打ったぞ、

起きろ、仕事だ、

六時が過ぎた、

早起きは三文の得、

三文の得！

(夜番は点いている街灯に近よる)また点けたんだな、もう消さなくちゃ。(二度息を吹きかける。二度目に唾を吐きかけると即座に消える。歌いながら退場)

#### 第二場

(伍長、少年鼓手、二名の兵士から成る歩哨隊が行進してくる)

伍長 隊列、止まれ。交代兵は前へ！(歩哨小屋に歩み寄る。ミヒルは太鼓をたたく。伍長は小屋の中をのぞく)こりゃ、信じられないぞ。ベーネの奴、眠ってやがる。今、何時だね？

ミヒル 六時です。

伍長 そうか、ベーネは七時に交代するんだったな。

ミヒル もちろん、ベーネの交代は七時であります。自分は、一時間早すぎたって知ってました。

伍長 それじゃ、なぜ言わなかったんだ。

ミヒル 伍長殿がご自分で気づくだろうと思ったのであります。

伍長 馬鹿奴。今度もそんなことしたら承知しないぞ。耳を引っばってやるからな。こいつ、一時間も早く、出かせさせて。

(歩哨隊は罵りながら退場する)

### 第三場

ミヒル (歩哨小屋をのぞき込む) あれ、本当に眠ってるんだな、ベーネの奴。おい、ベーネ、へい、何てこつたい。(小屋をノックする)

ベーネ お入り。

ミヒル 何が、お入りだ。こんな犬小屋、一人でいっばいじゃないか。出て来いよ。(ベーネを引っぱり出す)

ベーネ (立ったまま眠り続ける) 誰だい？

ミヒル 僕だよ。六時だよ。

ベーネ 何、六時？ 俺が交代するのは七時だぞ。(歩哨小屋の中に戻ろうとする)

ミヒル ここにいるよ、起こしてもらって感謝しろよ。

ベーネ ああ、今、夢を見てたんだぜ。実にエキゾチックな夢だった。こんな夢だ。俺はアヒルで、池の中を泳ぎ回っていた。そうして泳いでいるうちに、池の縁にどでかい、真っ黄色のイモムシを見つけたんだ。控え目に見たって、これくらいは黄色かったな。すぐに俺はそちに泳いで行った。そして、ちようどくちばしを開けて、イモムシをぱくりとやろうとしたその瞬間に、お前に起こされたんだ。

ミヒル そいつは悪かったね。そういう事情だってわかってたら、イモムシを食わせてやったさ。でも、あんたが六時にまだ夢を見てるなんて、知りようもないだろ？

ベーネ　そりゃそうだ。それに俺の方だって、「夢を見てるから起こすな」と言えないものな。

ミヒル　まあ、どっちでもいいよ。どうせいい夢じゃなかったんだから。

ベーネ　でも、アヒルにとつちや……

ミヒル　そりゃ、アヒルにはね。でも、あんたはアヒルじゃない。

ベーネ　でも、夢の中じゃ、俺はアヒルだったんだ。いずれにせよ、こういう夢には、お前はまだ若すぎる。

ミヒル　あんた、僕に起こしてもらって、ありがたいくらいのものなんだぞ。イモムシを食った後だったら、今頃どんなに気持ち悪くなってたか。

ベーネ　アヒルがイモムシで気持ち悪くなったりするものか。お前、こんなこともわからないのか？　誰一人、アヒルが本当に夢を見るかどうか、知りやあしない。誰も知らないんだ。動物学者が推測するだけだ。もし本当に夢を見たとしてもアヒルはそれを話せないしな。口が利けないんだから。オウムだったら話はちがう。あれはしゃべれるから。

ミヒル　ただの夢だったってこと、忘れちゃだめだよ。夢はうたかた、さ。

ベーネ　あれはうたかたじゃない、イモムシだった。それじゃあ、コーヒーを取ってきてくれよ。ここに十五クロイツァーある。この時代にはまだペニヒはなかったんだ。コーヒーを一杯、俺に一杯、お前に一杯　二人に一杯　全部で五杯だ。

ミヒル　この太鼓、持って行った方がいい？　それとも置いていく？

ベーネ　持って行くか、置いていくかだ。黄金の中道はない。

ミヒル　持って行った方がいい？

ベーネ　そうだ。

ミヒル　それとも置いていく？

ベーネ　どっちでもいいさ。まずはじめは持って行って、次は置いてけばいい。

ミヒル　うん、それじゃ、最初から置いていくよ。持って行く必要は全然ないんだもの。(退場する)

#### 第四場

肉屋の徒弟ギルグル（口笛を吹きながらやって来る。肩にソーセージの入った舟形容器をかついでいる。ソーセージが何本か外にたれ下がっているのが見える。ベーネの方を見ることなく、まっすぐリラの茂みへ行き、香りを嗅ぐ） あ、きれいなリラだ。一本、折り取るう。

ベーネ そんなことをしたらあんたをへし折ってやるぞ。朝に盗むなつてのを知らないのか？（ギルグルの舟形容器からソーセージを引っぱり出し、背中に隠す）

ギルグル 君が一本もくれなくたって構わない。僕はあそこから一本折り取るよ。神様はありがたいことに、こんなにあくさんのリラを咲かせてくれるんだ。

ベーネ ふん、それじゃ、神様の木を折れよ。俺の木はそつとしいてくれ。

ギルグル くれたっていいのに、けちん坊、どけち。（退場の際に、牛乳の入った茶碗二個とパンを持って戻ってきたミヒルとぶつかる）

## 第五場

ミヒル 馬鹿、注意しろよ。

ギルグル よく見て歩け、このクソガキ！（退場する）

ミヒル そんな口を利くと、二、三発お見舞いするぞ！

ベーネ ほつとけ、怒るなよ。

ミヒル ただいま。コーヒーはまだなかつたんだ。店のおかみが寝坊したんだって。だから牛乳を持ってきた。いいよね？ コーヒーと牛乳は双生児のよなものだから。

ベーネ どうしてソーセージなんだよ？ お前、俺がソーセージを盗んだの見たのか？

ミヒル ソーセージを盗つたの？

ベーネ 肉屋がやってきて、俺のリラの花を折ってこうとしたんだ。それでそのお返しにソーセージをいただいたんだ。

ミヒル どれくらい盗つたの？

ベーネ それが一本だけ盗るつもりだったんだけど、次々に全部つながってきちゃったんだよ。

ミヒル それ、どこにあるの？ もう食べちゃったの？ ねえ。

ベーネ そうとも、あんなものは置いておけないよ。

ミヒル 嘘だよ。手を見せてよ！ そっちの手も！ さあ、両方とも！ 次は両足を上！

ベーネ それじゃ、尻もちをつくよ。(ソーセージを足の間にはさむ)

ミヒル 僕はそんなに馬鹿じゃないよ、反対を向いてみて。そしたらすぐに見つけるぞ。(ベーネをつかみ、向きを変えさせ、後ろにたれ下がっているソーセージを見つける) あ、こんなにたくさん！(ソーセージをかかえこむ) 今、食べようよ。半分くれたら、あなたの盗みのこと誰にも言わないよ。

ベーネ わかった、半分やる。(サーベルを取り、一本のソーセージを半分に切ろうとする)

ミヒル ちがうよ、一本の半分じゃなくて、全部の半分！

ベーネ まあ、いいや、分けよう。(遠くから馬のひづめの音とむちの鳴る音が聞こえる) 誰か来るぞ。

ミヒル ソーセージを隠さなくちゃ！(ソーセージを隠そうとあちこち試したあげく、結局、大砲の筒の中に押し込む。二人はすばやく牛乳の茶碗を取り、食事を始める)

## 第六場

御者 君たち何をしてるんだ、のんびりコーヒーなんか飲んで。ミュンヘンから一時間のところじゃ大騒ぎが起きてるんだぞ、強盗騎士の一団が郊外のベルク・アム・ライムに来てるんだ。

ベーネ それで？

御者 それで？

ベーネ それで、どうしたの？

御者 それで、きょうにも町を襲ってきそつなんだよ。

ベーネ どの町を？

ミヒル ぼくらの町だよ。

ベーネ この町は我々のものじゃない。

ミヒル もちろん、あんただけのものじゃない。

**御者** 馬鹿なことを言ってるんじゃない。君は歩哨としてすぐに必要な処置を取らなければいけない、ということだよ。君たちは、この外のベルク・アム・ライムがどんな様子だか、ちっとも知らないんだな。

**ペーネ** ええ、外に出てませんから。

**御者** じゃあ、私がこの外じゃどうなってるか話してやろう、言葉にできないくらいなんだ。今朝三時半に私がラマース村で車に馬をつないだ時、もう家々が燃え、野や森が炎に包まれているのが見えた。人々はあちこち走り回っていて、私にこう叫んだ。「ベルク・アム・ライムに強盗騎士が来て、盗んで、殺して、奪って、略奪して、皆殺しにしてるんだ」そして私はベルク・アム・ライムに入って、強盗騎士を目の当たりにした。ひどく不気味な奴らだった。全員、ブリキの服と帽子を着け、髭もじゃなんだ。目玉をギョロギョロさせて、見るも恐ろしい。家畜は途方にくれて、その辺を走り回ってた。

**ペーネ** ああ……

**御者** そしてベルク・アム・ライムの村長はしばり首にされたそうだ。

**ペーネ** ああ……

**御者** だから、私の話を信じるんだ。私は今、身一つで逃げてきたところなんだ。

**ミヒル** ベルク・アム・ライムで服を脱いじゃったの？

**御者** いや、でももう少しでつかまるところだったんだ。強盗騎士たちは私を見つけると、近寄ってきた。だけど私は即座にむちを引き出して、打ちかかった。(むちを振る。するとそれがミヒルに当たる。ミヒルはペーネに突き当たる。ペーネの牛乳がこぼれる) さあ、歩哨 (ペーネの牛乳茶碗を手でたたき落とす)

**ミヒル** こいつが悪いんだ。

**御者** 興奮するとよくあることだろ。さあ、歩哨、すぐに警報を出せ。太鼓で兵隊を集める。市門を閉める。ほら、やれって言ってるだろう。

**ペーネ** その通りですね。でも俺は、こいつう件について何も処置を講ずることを許されてないんです。

**御者** どうしてだ？

**ミヒル** ペーネは隊長の命令なしには何もやれないんだって言ってるんだよ。

御者 くだらん。じゃあ誰が門を閉めるんだね。歩哨の君が鍵を持ってるんだろ。

ミヒル もちろん、こいつが閉めるんですよ。でも夜の九時にね。

御者 でもそれじゃ遅すぎるんだ。それまでに強盗騎士はやって来る。

ミヒル きつとゆっくりやって来るさ。

御者 君たちはいったい馬鹿なのか？

ベーネ さあ、どうだろう。

御者 君は歩哨に立って何をしてるんだね？

ベーネ サーベルをつけて行ったり来たりします。雨が降ったら小屋の中へ入ります。そして夜の九時に門を閉めます。他に何かすることがありますか？

ミヒル それから、お天気になったら、こいつはまた小屋から出て来るよ。

御者（ミヒルに尋ねる） それで君はいったい何をしてるんだね？

ミヒル 僕はベーネのお使いをしてるんです。それから時々、火事があると、太鼓をたたきます。

ベーネ 火事があると、やぐらの見張りが見つけて、下の俺たちのところへメガホンで叫ぶんです。するとミヒルが太鼓をたたく。すると隊員が集まってくる、どこが火事なのか聞く。すると俺たちがそれを教え、消すって寸法なんだ 火事があるとね。

ミヒル 他にも僕の仕事はまだあるよ。僕はいつも見張ってて、王様の馬車が来たり、將軍が通りがかったら、ベーネに伝えるんだ。するとベーネは歩哨隊を鐘で呼び出すんだよ。なぜってこいつはたいいてい居眠りしてるからね。

ベーネ そうなんだ。俺に権限があるのは歩哨隊の呼び出しだけなんですよ。見せてやろうか。（鐘のところへ行き、それを引く。ただちに歩哨隊が楽隊ともに出て来る）

伍長（号令をかける） 止まれ！ ささげ銃！（楽隊はこの時、閲兵行進曲を演奏する。号令をかける）立て銃！ 前へ進め！（歩哨隊は退場する）

御者 やあ、これは見事だ。でも君は適切な軍事行動をとらなければいけない。楽隊が出てきてトテチテタってやったって仕方ないんだ。

ミヒル 何だ、楽隊のこと？ 兵隊の方は見なかったの？ もう。もう一度、

引けよ。（ベーネは鐘の紐を引く。歩哨隊、再度、行進する。兵士の一人は旗を

持って出てくる)

**御者** おい、こんなことして何になるのかね。それよりも何か策を講じなければならんのだ。

**ミヒル** ベーネがこんなことをしたのは、自分の権限はこれだけだってあんたがわかるようにだよ。この鐘の紐を引いていいのはベーネだけなんだ。

**ベーネ** そうとも。俺はこれを好きだけ引っぱれるんだ。俺が百回引っぱったって、歩哨隊はその都度出てこなければならんのだ。見てな！(もう一度、鐘の紐を引く 歩哨隊は三度目の行進をする)

**御者** 君らは私に今までにお目にかかった最大の阿呆だよ。君らが強盗騎士に丸ごと食われちまったって私はちっとも構わんよ。私は自分の義務は果たしたんだ。もう関係ない。

**ベーネ** 俺だって自分のできることをしたんだ。この紐を引く以上のことは俺にはできないんだから。(また紐を引く 歩哨隊は四度目の行進をする。伍長は御者をわきへ突き飛ばす。御者はむち音と馬のひづめの音の中、罵りながら遠ざかる。 歩哨隊も罵りながら退場する。 伍長は残る)

**伍長** このひっきりなしの鐘の合図は何なんだ。これなら、出たままにいる方が、ずっと利口だ。今のは誰だったんだ？

**ベーネ** 牛乳配達夫です。

**伍長** ふん それでそいつのためにお前はわしらを呼び出したのかね？ ひどいじゃないか。もう一度やって見る！

**ベーネ** 俺は好きだけ鐘を鳴らすさ。そして鐘が鳴ったら、あんたらは出てこなきゃならないんだ。

**伍長** でも、それはお偉方が来た時だけだ。何て奴だろう。今度やったら、隊長に言つぞ。こんな朝っぱらの、腹ペコの時に歩き回らせて、まったく体に毒だよ。(怒って退場する)

## 第七場

(ミヒルとベーネがベンチに腰かけている)

**ミヒル** ねえ、ベーネ、あの御者の強盗騎士の話、どう思う？

**ベーネ** あれはな、ただ俺たちを怖がらせようとしただけさ。強盗騎士なん

て今時いないさ。強盗騎士はいない、イースターウサギも、サンタクロースも、ここのとりもないんだ。

ミヒル そうだよな。

ベーネ うん。そうとも、強盗騎士なんていないさ。それにあの御者の言ったみたいな、ブリキの服にすごい髭を生やしたなんてのは絶対いない。国立博物館にはそんなもの置いてあるけど、あれは中は空だ。悪い人間てのはいるさ、他人を襲ったりするよな。そういうのも強盗騎士だよ。

ミヒル じゃあ、強盗騎士はいるの？

ベーネ もちろんいるさ。でも御者が話したようなのはいないんだ。

ミヒル でも断言はできないね。ことによると昔の生き残りがまだいるかもしれないね。

ベーネ そうだな、はっきりしたことはわからんな。

ミヒル ベーネ、あのね、もしそんな強盗騎士がいるんだったら、あんたは怖い？

ベーネ 俺が 怖いかつて？ まさか、とんでもない！ もしやって来たならば、そしたらやっぱり怖いけどな。

ミヒル やって来たら、僕も怖いよ。そしたら逃げちゃうよ。僕は早く走れるから、つかまらない。でも伍長は大変だろうな、あの太鼓腹じゃ駆け出せないもの。

ベーネ あいつ、きょうは何度も行進させられたものだから怒ってたな。もう一度、鐘を鳴らしてやるつ。カンカンになるぞ。(鐘を鳴らす 歩哨隊は出てくる そして罵りながら退場する)

伍長(残っている) 誰がまた来たのかね？

ミヒル 牛乳配達夫です。

伍長 そいつはさつきいたんだろつ?!

ミヒル もう一度来る気になったんです。

伍長 もう我慢ならん。腹が立つ。用もないのにひっきりなしにわしらを呼び出しおつて。(ベーネは鐘の紐に手を伸ばす)ベーネ、その手を離せ。何てことだ。隊長にもう言うからな。出たり、入ったり、もう頭が変になる。ちくしよつ、ちくしよつ。(腹を立てて退場する。ミヒルとベーネは笑つ)

**ミヒル** もうカンカンだね。きのうも怒らせてやったんだ。あのね、靴屋のあいつの仕事場で、奴のバターパンに靴用のにかわを塗ってやったんだ。それから、奴の眼鏡を隠した。奴さん、よく見えないままパンにかぶりついたら、口が貼り合わさったんだよ。

**ペーネ**（笑う）　なあ、ミヒル、今度は奴の椅子ににかわを塗ってやれよ。

（この会話の最中に書記が登場するが二人は気づかない。ミヒルは最後の台詞のところ突然、書記に気づき、ペーネをつつく。ペーネも書記を認め、立ち上がり、サーベルをひき抜いて、行ったり来たり哨戒する）

## 第八場

**書記**　おはよう、皆さん。

**二人**　おはようございます、書記殿。

**書記**　いやはや、今朝は早くから何が起きたんだね。太鼓、楽隊、大声、いったい何事なんだ。

**ミヒル**　あれっ？　ご存じないんですか、書記殿？　牛乳配達達の御者がやって来て、強盗騎士が町を襲うつもりらしいって、言ったんです。

**ペーネ**　強盗騎士は郊外のベルク・アム・ライムに来て、人々を皆殺しにしました。

**書記**　それは大変だ。早く話してくれ！

**ミヒル**　うん。その御者は毎朝、ベルク・アム・ライムに出かけるんです。そして今朝、行ってみたら、ベルク・アム・ライム中がひどいことになってたんです。

**ペーネ**　ええ、そして暴風が苦痛のあまり泣きわめいていたって、言っていました。それから火は燃えさかり、空は血緑色で、ヘロデ王は七匹の子ヤギと共に外に立ってました。

**ミヒル**　御者はこんな有様を見て怖くなり、逃げようとしたんだけど、強盗騎士が追いかけてきて服を奪ったんです。それで御者は真っ裸になってしまいました。

**書記**　それからどうしたんだ？

**ミヒル**　それから強盗騎士たちは、御者の運んでいた牛乳を全部飲み干して、

そして御者を殺そうとしたんだけど、御者は木の後ろに隠れて、それから眠ってしまいました。すると突然、自分がアヒルですごく長いイモムシを食べたという夢を見たんです。

ペーネ そのアヒルとイモムシの夢は俺が見たんだよ。

ミヒル ああ、そうだった。僕は馬鹿だなあ、ごちゃまぜにしちゃって。イモムシを食べたのはこいつでした。

書記 それは強盗騎士と何か関係があるのかね？

ペーネ 全然。まったく無関係です。

書記 じゃあ、先を話すんだ。

ミヒル それから、御者がもう一度あたりを見回してみると、家はすべて焼けてしまって、ベルク・アム・ライムの雄牛や牛、全部がその辺を走り回って途方にくれてたんです。

書記 ひどいな。それから？

ミヒル 通りに出てくる人は誰もいません。皆、死んでしまったから。

書記 もう十分だ。ひどいことだ。すぐに市門を全部閉め、市民軍を召集しろ。すぐに仕事にかかるんだ。

ペーネ ですがね、書記殿、俺たちはこんな時に何も策を講じることは許されてないんですよ。御者にも説明したんですが。

書記 でもお前は隊長のところへ行つて、報告できるだろう。

ペーネ 俺は自分の持ち場を離れてはならんです。命にかけてもできない。何が起ころうと、俺は持ち場を離れてはいけません。洪水の時でも。流されない限りは。

書記 それじゃ、この小さいのを隊長のところへやるのだ。

ペーネ こいつは俺の要るものを取ってこなくちゃいけないんです。

書記 隊長はいつ来るのだ？

ペーネ 十時半か十一時になりますね。

書記 それじゃ手遅れになるだろう。

ペーネ それは、どっちが先に来るかによろしく、強盗騎士か、隊長か。

書記 そんなことは言っておれん。何か策を講じなければ。強盗騎士は一時間のうちに来るかもしれない。

ペーネ　　かもしれせんな。

書記　　我が町にこんな危険が迫っているというのに！　強盗騎士はこの瞬間にも来るかもしれないぞ。

ミヒル　　ええ、来るのは確かです。だって奴ら、御者にそう約束したんだもの。

ペーネ　　俺たちに見える唯一のことは、歩哨隊を呼び出すことだけです。御者にも見せてやったんですけどね。（鐘を鳴らす）

（歩哨隊は行進して、退場する　全員、罵っているが、書記を見ると、急に口をつぐむ）

書記　　君らは私の知ってる限り、最大の阿呆だよ。

ミヒル　　御者もそう言っていました。

書記　　まぶたに浮かべてみるんだ　　（ミヒルとペーネはまぶたをこする）  
まぶたに浮かべるんだ　　（ミヒルとペーネはもう一度まぶたをこする）  
頭の  
中だよ

ペーネとミヒル　　頭はないんです。

書記　　強盗どもがやってきたら、強奪、略奪し盗むんだぞ。

ペーネ　　そんなことされたら俺たちだってかなわんですな。

書記　　だから対策を立てなければならんだ。強盗騎士って奴らは何にもお構いなしなんだぞ。女子供だってさらっていくんだ。

ペーネ　　そんなの取るに足らんことですがね。

書記　　隊長は今どこかね？

ペーネ　　あっちのファーバー酒場にいます。玄関ホールに白ペンキを塗ってるはずですよ。

書記　　それなら、私が自分で隊長のところへ行って、話してくる。（退場する）  
（遠くに人のざわめき（スピーカー）と警官のハンドベルの音が聞こえる）

## 第九場

（警官が、群衆に囲まれて現れる　歩哨隊は行進する　「何だ、何だ」という声が聞き取れる）

警官　　すぐに話しますよ！（ハンドベルを振り、叫ぶ）

布告

栄誉ある市参事会は、強盗騎士の一団がラマース村より接近中である旨、告げ知らせる。それ故、常に市民の身柄の安全をはかる市参事会としては、以下の措置を告知する。(ハンドベルを鳴らす)

一、公国市民保護法第三三三と三分の一条に従い、本日より、夜の八時半の時鐘をもって全市門を閉鎖する。(ハンドベルを鳴らす)  
二、武器を所有する市民は全員、あらゆる場合に備えられたい。(ハンドベルを鳴らす)

三、歩哨に立つ市民はしっかり敵を見張られたい。

栄誉あるミュンヘン市参事会の名において警察官ヨーゼフ・ヴィンターフーバーが自ら朗読し発表するなり。

(群衆と歩哨隊はつぶやきながら上手、下手に退場する)

**警官** 少年鼓手、君は本官といっしょに今すぐゼンドリンガー門に行って、太鼓をたたいてくれ。

**ペーネ** だめだ、こいつには俺が用があるんだ。

**警官** いや、本官も用がある。この子は本官といっしょに来るのだ。

(警官とミヒルは退場する。ペーネと伍長だけがその場に残る)

**ペーネ** これで、伍長さんよ、強盗騎士の話が本当だとあんたも信じただろう。おまわりが公式に読み上げたんだもの。これは冗談じゃない、本当なんだ。

(背後からの大砲の音が二人を驚かせる)

**伍長** 今のは何だ？

**ペーネ** 大砲ですよ。三十年戦争以来、平穩だったのに、今、また始まったにちがいない。俺が若く結婚して、小商いの店を建てた今になってよ。(背景が赤く照らし出される)

**伍長** わしにはどうしてやることもできんよ。これから家に帰って、長靴に新しい底革を貼らなければならぬんだ。

**ミヒル** (戻ってくる) ねえねえ、まわりを見てごらんよ。

**伍長とペーネ** どうしたんだ。もうやって来たのか？

**ミヒル** だから、まわりを見てごらんよ。あの後ろは真っ赤だよ。あそこはもう燃えてるんじゃないの？(伍長とペーネは振り向く)

ベーネ あれあれ、朝焼けだ。モルゲンロート あんたは、朝焼けが俺たち兵隊にとって何を意味するか、知ってるか？

伍長 いいや。

ベーネ 情けない兵隊だな。朝焼けってのは「きょうは白骨、明日は紅顔」モルゲンロート かってことなのさ。〔訳注〕「きょうは紅顔、明日は白骨」が本来の諺

伍長 もう行かなくちゃ。家族に別れを告げなくちゃならない。ベーネ、あんたに神のご加護があるように。何があっても元気でな。(すすり泣きながら退場する)

(ベーネとミヒルだけが舞台上に残る。ベーネは歩哨小屋からアコーデオンを取ってくる。二人はベンチに座る)

ミヒル もう牛乳も飲む気がしない。

ベーネ 朝焼け、神よ、守りたまえ。(アコーデオンでいくつかの和音を弾き始める 弾丸が一発飛んでくる。二人はびっくりして飛び上がる。それから二人で歌う)

モルゲンロート  
朝焼けよ、朝焼けよ、

早すぎる死への道を照らしておくれ。

じきにラッパが鳴るだろう、

そうしたらこの命とお別れだ、

私と大勢の仲間たちは。

ああ何てたやすいのだろう、

美しい姿が消え去るのは。

きょうはまだ堂々と馬の上、

あすは胸を撃ち抜かれて、

あさっては冷たい墓の中。

幕

数分間の中休み

## 第二幕

### 第一場

(舞台はすっかり明るい。ベーネが歩哨小屋の前に立っている。幕はバイエルン閲兵行進曲の鳴り響く中、素早く開く。すぐに部隊が行進してくる。先頭に隊長、次に少年鼓手たち、その後ろに楽隊、それから伍長、最後に旗手その他の歩哨隊。全員がベーネのわきを通り過ぎる。ベーネは隊長が通り過ぎる時、敬礼する。部隊は舞台を一巡する。伍長が号令をかける)

伍長(隊長に近づきながら) おはようございます、隊長殿。ご機嫌いかがですか？

隊長 おはよう、伍長。そうだな、まあまあだ。ちょっと忙しい。うちじゃいつも何かしらあるしな。ばあさんがきのつ歯を抜いてな、きょうは機嫌が悪いんだ。

伍長 さて、隊長殿、私の部下の者たちはいかがでしょう。見てやって下さい。

隊長 見事だ、見事だ、しゃきつとして。たいしたものだ。こういう者たちを見るのは本当に嬉しいね。元気かね、皆さん。

兵士たち 元気であります、隊長殿。

隊長(一人の兵士に近寄る) マイヤー、おめでとう。で、どっちだったんだ？ 女の子か、男の子か？

兵士マイヤー 男であります、隊長殿。

隊長 たいしたものだ。五男だね、マイヤー？

兵士マイヤー 九男であります、隊長殿。

隊長 見事だ、たいしたものだ。このマイヤーは衰えとらんのだな。それはそうと、きょう歩哨に立ってるのは誰かね？

伍長 ベーネです。(ベーネとミヒルはずっとおしゃべりをしていて、伍長の言葉を聞いていない。伍長、声を大きくして)ベーネです。(ついに叫ぶ)ベーネです。(ベーネはやっと自分が話題に上っているのに気づく)そして、歩哨

小屋のそばを滑稽な仕草で足早に行ったり来たり始める)

隊長 (しばらくそれを眺めてから) おい、やめないか。君は一日中、そんなに駆けまわってるのかね？

ペーネ いや、隊長が来た時だけです。

隊長 やめるんだ。おはよう。(ペーネに手を差し出す)

ペーネ おはようございます、隊長殿。(手ではなくサーベルを差し出す)

隊長 痛いぞ。切れるじゃないか、注意したまえ。わしに何か報告することがあるかね？

ペーネ ええ、小さなストーブのことで一度、お願いしたかったんです。歩哨小屋の中はいつも寒いんです、天気が悪いと。それで、小さなストーブを小屋の中に入れてもらえないかお願いしたいんです。こんな小さなのでいいんです。

隊長 そうか、小さなストーブだな。一つ手に入れるようやってみよう。

伍長 上の倉庫に一つあります。それを持って来れるでしょう。

隊長 そうか、伍長、調べてみてくれ。それはそうと、あの太鼓たたきのちびは元気かね？

ペーネ 相変わらず厚かましいです。

ミヒル 今朝六時にぼくはペーネを起こしました。こいつ眠ってたんですよ。

(ペーネはミヒルをつつく。伍長はわざとらしい大きな笑い声をあげる) こいつ朝の六時にもうアヒルを持ってたんです。

隊長 何だね、その馬鹿げた話は。いったい何のことなんだ？

ペーネ いえ、俺は、とても小さいストーブをお願いしてるんです。

隊長 君のストーブの話はもうおしまいだ。頭がおかしくなる。いつまでもストーブの話なんかして。強盗騎士が近づいてるっていうのに。先頭はもう着く頃かもしれんぞ。誰かやぐらに登って、敵を見張るのだ。

(全員、場所を入れ替わる。ラッパ吹きは退場する)

伍長 ペーネ、お前、今すぐやぐらに登れ！

ペーネ とんでもない。登るのはヴィンツェンツですよ。

隊長 それじゃヴィンツェンツ、君が登れ。そして何か怪しいものが見えたら、すぐに合図をするんだぞ。

ヴィンツェンツ 了解。しかし、何も見えなかったら？

ベーネ 何も見えないかどうかわかるんだよ。

ヴィンツェンツ やぐらの上じや鉄砲はいらない。(銃をベーネに立てかけ、やぐらに通じる戸口に消える。ベーネはその銃を伍長に立てかける。伍長はそれを隊長に立てかける。隊長はそれを伍長に立てかける。伍長はまたベーネに立てかける。ベーネは隊長に立てかける)

隊長 どうしてその銃をひっきりなしにわしに立てかけるのだね？(銃をベーネに立てかける)

ベーネ でも何もないところには立てかけられませんよ。ひっくり返るもの。

(銃を支えなしに立たせようとする 銃は倒れる)

隊長 誰かその銃を片付けたまえ！

伍長 ふん、自分でやれよ。

隊長(銃を拾い上げ、片付けながら) こいつらとつき合うのはうんざりだ。

さあ、今度は大砲の手入れだ、また全部錆ついたりせんようにな。それから、その他もすべてちゃんとしているか調べるのだ。

(この間にヴィンツェンツがやぐらの上に姿を現す。あたりをうかがい、ラッパで合図をする)

全員(見上げて) どうしたんだ？

ヴィンツェンツ かなり遠方、ガスタイクベルクのそばに、何かがこちらへ向かっているのが見えます。黒っぽい大きな一団です。例の強盗騎士と思われるます。

ミヒル え？ やっぱり強盗騎士はいるんだね？ ベーネは、強盗騎士はもういない、イースターウサギもサンタクロースもいないって言ったのに。

隊長 この馬鹿な坊主はイースターウサギの話なんか始めおつて。強盗騎士が来るっていう時に。さあ、全員、銃眼と大砲の汚れを払うんだ。

ベーネ それはできませんや。モップがないんです。伍長が煙突掃除人に貸してしまっただんです。

ミヒル そうだよ、僕はいつも、あれを貸したらいけないって言ってたんだ。でも、あの老いぼれの阿呆が貸しちゃったんだ。

隊長 ああ、何てだらしないんだ。だが、わしの記憶ではモップは二本あつ

たはずだ。もう一本はどこにあるのかね？

ペーネ そっちは大砲の中にささってます。誰もあんなとこ、登れんでしょう、敵が近づいているこんな時に。

隊長 あそこに登る者くらいいるだろう？！ 伍長、部下の者たちに勇気のあるところを見せてやるんだ、君が登るんだ。

伍長 また俺がそんな馬鹿な真似をしなきゃならないのか？（ベンチの上上がるうとするが、じきにそのまま戻ってくる）隊長殿、他の者をやって下さい。その方がいいと思います。

ペーネ あいつ怖じ気づいたんだ。

ミヒル 登る勇気がないんだよ、臆病者。怖くなっただ。

隊長 伍長、これは職務命令だ、君が登るのだ。

伍長 よりにもよってこの俺があんなとこに登らなくちゃならないなんて。

（ペーネとミヒルに支えられて、ベンチの上上がる。伍長の頭が市壁の上に出たとたんに弾が一発飛んでくる。叫ぶ）痛い、痛い！（ベンチから下りて、鉄製の重たい砲弾を地面に落とす）

ミヒル 脳天直撃なものな、きつとポーツとしてるよ。

伍長 以前からそうだ。

ペーネ これは強盗騎士の弾だ。まだ暖かいぞ。

ミヒル 拾って、箱にしまおう。誰にも渡さないぞ。

ペーネ そうだ。そうしてボーリング・クラブを作ろう。（弾を転がす）そら、ピンが全部倒れた！

隊長 はり倒すぞ。大砲のモップの方はどうなってるのだ？

ペーネ 俺にいい考えがあります。大砲を穴から引き出すんですよ、そうしたらモップが取れる。

ミヒル そうだ、それがいい。（二人は大砲をもたもたと壁の穴から引きずり出す。ペーネは車輪の下に足を入れてしまい、ミヒルをひどく罵る 二人は大砲を観客席に向けてすえる）

隊長 ほら、あわてないでやりたまえ。伍長、君は、大砲があつた穴の前に立つんだ。風が入って来んように。

伍長 ほら、もう風は入らないぞ。（この瞬間に、また弾が飛んでくる）痛い、

痛い。(後ろに回していた手から、鉄製の重い弾を落とす) 痛い、痛い。(泣きながら衰れっぽく叫ぶ。それからベンチに座ろうとする うめく) 座ることもできない。(うめき、泣き続ける)

ミヒル そんなに痛いのか？

伍長 いや、へっちゃらさ、馬鹿奴。

ベーネ こいつは大げさなんだよ。

隊長 さあ、大砲の掃除の方はどうなってるのかね？ ミヒル、さあ、やれ。ちょっとは急げよ。(ミヒルはぐずぐず大砲の筒を掃除する) 何やってるんだ、さっさとしろ、ミヒル。

ミヒル あんな騎士団のためにあくせくなんてできないね。

## 第二場

ギルグル(警官といっしょに来る) あそこにいます、ベーネです。

警官 おい、ベーネ、ギルグルが、今朝お前にプチソーセージを全部盗られたと申し立てておる お前はそれを認めるかね、それとも否認するかね？

ベーネ はい。

警官 「はい」ってのはどついつことだ？

ベーネ 否認します。

警官 しかし、ギルグルはお前がソーセージを盗んだと申し立てておるのだ。すると、盗みがあったか あるいはギルグルが嘘をついているかだ。

ベーネ そうです、嘘をついているんですよ 嘘つきは泥棒の始まり。

ギルグル 何で私が自分のソーセージを盗んだりするんですか。君が盗んだんだ！(ベーネにつかみかかろうとする 警官がそれを押しとどめる。ベーネは大砲のモップを引き出し、それでギルグルに応戦しようとするが、背後にいた伍長の頭にそれが当たる)

伍長 わしの邪魔をするな。

(ベーネはモップを大砲の筒に突っ込む。すると中にあったソーセージが押しされて出てくる 全員、笑う)

ギルグル(ソーセージに駆け寄り、腕にかかえる。それを警官に示しながら)

ほら、おまわりさん、ソーセージです。

警官（ベーネに）　おい、ベーネ、どうして、あの先からソーセージが出てくるのだね？

ベーネ　後ろから押されたからですよ。

警官　いや、本官が知りたいのは、なぜ、ソーセージがそこに入ってたかってことだ。

ギルゲル　どうしてそこに入ったか、私が言いますよ。今朝、ここを通りがかったとき、私はそのリラの花を眺めたんです

ベーネ　眺めた？　盗ろうとしたくせに。おまわりさん、こうなんです。今朝は強い西風が吹いてました。で、ギルゲルが容れ物をついで通りがかった時、風がソーセージを吹き落としたんです。そして、大砲の口がたまたま開いていたものだから、風はソーセージをまっすぐその中へ吹き入れたんです。ミヒルもそれを見ました。あの子もその場にいたんです、そうだな、ミヒル！

ミヒル　その通りです。この目でも見たし、それに、もし僕が何にも言わなければ、僕も半分もらえらるって言われたんですから。

警官　誰から半分もらうのだね？

ベーネ　風から。

警官　すると、本官はその風を逮捕しなければならぬんだな。

ベーネ　でもつかまえられんでしょう。

（ヴィンツェンツがまた合図のラッパを吹く。全員がやぐらを見上げる）

全員　どうしたんだ？

ヴィンツェンツ　騎士団はどんどん近づいています。それから敵は大砲を山ほど持っています。

警官　何？　騎士団が来るって？　すぐ戻らなくちゃ。（大股で舞台を横切って退場する）

ギルゲル　私もだ。さもないと私のソーセージを騎士団に全部食べられてしまふ。

（ソーセージをつかんで、やはり急いで退場する。ミヒルと伍長は力を合わせて大砲を押して市壁の穴の中にはめる）

## 第三場

隊長 さあ、皆の者、勇気を出せ、敵は近づいた。それでは我々の大砲の試し撃ちをしよう。強盗騎士の襲撃の時にちゃんと使えるようにな。

全員（歌う）

ああ、本当につらいよ

ミュンヘン市民軍の仕事は。

我らの任務は人気がない、

休む暇もないんだから。

特に砲兵隊は大変だ、

こりゃ最大の皮肉だよ。

ちつばけなことのために、

もう祝砲を用意だよ。

（繰り返し）

タラララ、ドン、おーい、

砲兵隊だぞ。

タラララ、ドン、おーい、

砲兵隊だぞ。

（ミヒルは大砲に弾を詰め、繰り返しが始まる度に発射する。常に、繰り返しの最初の「ドン」のところで、大砲が発射され、煙が立ち上る）

軍旗授与式があると、

砲兵隊も出席だ、

そのうえオクトーバー・フェストにも

毎年、登場するのさ。

競馬があれば、

砲兵隊は丘の上に立つ。

大砲がドン、

すると馬が走り出す。

タラララ、ドン、おーい、  
砲兵隊だぞ。

タラララ、ドン、おーい、  
砲兵隊だぞ。

王様に子供ができれば、  
さっそく祝砲だ。

行進がある度に、  
大砲だ。

すなわち、くだらんことがあれば、  
大砲のお出ましなのさ。

大砲がすてきなものは、  
戦争の時だけ、その時は撃たないんだ。

タラララ、ドン、おーい、  
砲兵隊だぞ。

タラララ、ドン、おーい、  
砲兵隊だぞ。

(二番が終わると、ヴァインツェンツの合図が響く)

**全員** どうしたんだ？

**ベーネ** こたまでしよう。

**ヴァインツェンツ** いや、こたまじゃない。私だ。最高度の危機です。騎士団  
はほとんど近づいており、大砲の数も増えてます。最高度の危機です。(全員、  
浮き足だつて入り乱れて走り回る 音楽は止む)

**ミヒル**(太鼓とむしろを持って叫ぶ) 僕はもう全部、持った。

**ベーネ** むしろまで持ったのか？

**ミヒル** 怖くなったとき、むしろんだ。

**隊長** 皆の者、落ち着け！ 度を失うな、冷静になれ！ 伍長、君は第一の  
大砲を受け持て、ミヒル、お前は第二のだ。ベーネ、君は誰かがけがをしたら、

救護活動を担当しろ。みんな、銃眼越しに砲撃するのだ、そこで銃を支えて。

(ミヒルが両方の大砲を扱う。弾を装填し、「第一あるいは第二の砲、発射」という命令のある度に発射させる。「発射」のところ常到大砲の破裂音と煙が立ち上る。遠方から、まだいくらか弱くだが、叫び声と銃声が聞こえてくる。伍長はミヒルと交代で発射の命令を終幕までかけ続ける。ある時は一方の、ある時はもう一方の大砲に。ベーネと隊長の会話があるときだけは、中断する。ミヒルのところに第二の大砲の先端から次々と全部の弾が転がり戻ってくる。ベーネは、けがをした一人の兵士が街灯の柱に寄りかかっているのを見つけ、すでに肩にかけていた救急かばんから幅広の包帯を取り出し、兵士の頭に巻く。だが、柱も、ヘルメットも銃も全部いっしょに巻きこんでしまう。

隊長はときおり、ピストルを壁の向こうに発射し、その合間に命令を与える。その他の兵士たちは銃眼越しに撃つ。大男は市壁の上に銃を置いて、そこから撃つ。

一人の兵士が大砲の弾を受けて、倒れる。弾は軍服の上着の中に入ったままである。ベーネとミヒルは担架と毛布を運んできて、地面に倒れている兵士を担架に載せる。ミヒルは砲弾を負傷者の軍服の中から取り出す。二人は担架を持ち上げるが、担架には底がなく、空の担架を持って退場する。ベーネとミヒルは戻ってくる)

隊長(まだ地面に横たわっている負傷者に気づき、ベーネに) この男はどうしたのだ。早く運び出したまえ。

ベーネ 今、運び出したとことですけど。

隊長 そんなはずはない。ここに寝てるじゃないか。

ベーネ まったくがんこな奴だな。

(ベーネとミヒルは別の。今度はちゃんとした。担架を持ってきて、その負傷兵を載せる。まずベーネが立ち上がり、次は担架の反対側でミヒルが立ち上がり、次に負傷者が担架の横や前や後ろからすべり落ちたりという風に作業はもたもたと行われる。とうとうベーネはもう我慢できなくなり、負傷者を担架の前に立たせ、ベーネと担架の間でその男が自分の足で歩くようにする。

喧噪はいよいよ大きく、銃声は激しくなる。突然、観客席が明るくなる。敵からの砲弾のつもりの布製の風船がいくつも市壁の向こうから観客席の中へ飛

んでいく。強盗騎士団が叫び声を上げ、大きな音を立てながら市壁の上に現れる。甲冑をつけた一人の強盗騎士が舞台の上に飛び降り、太った伍長の腹に槍を、その先が背中へ抜けるほどぐさりと突き刺す。ペーネは歩哨小屋から白い小旗を持つてくる。ミヒルは砲弾を観客席に投げ込む)